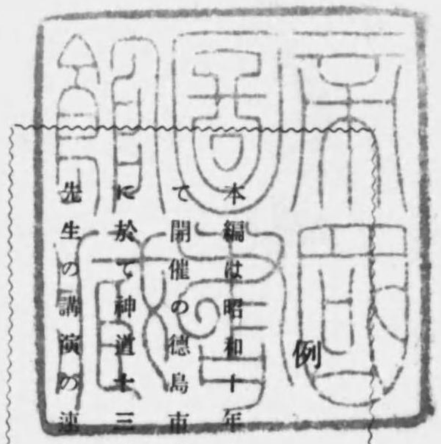
特247
361

宗教的情操の神髄

始

特247
361



例言

本編は昭和十年十二月七日徳島市議事堂に於て開催の徳島市學務課主催第一回宗教講演會に於て神道十三派を代表し我黒住教河本一止先生の講演の速記を印刷したものである。

宗教的情操の神髄

河本一止

私只今御紹介を得ました黒住教の河本でございます。今回圖らずも當市の主催に依りまして宗教講演會をお開き下されまして大變私共として喜んで居る次第であります。尚それに就きまして第一回のお催しに神道側を代表して賢明なる諸君の前に、私の兼て抱懷致しまする「宗教的情操」といふお話をするやうになりました事を欣幸と致す次第であります

約一時間ばかり時間を與へられて居りますどうか其間御清聽を煩します。

御承知の通り近來文部當局に於れましても宗教々育といふことが余程熱心に唱へられて居るのであります。是は只今も司會者の方と互にお話した事でありますが、明治初年我國が德川氏三百年間の鎖國の夢を破りまして初めて歐米各國と交通を開いた此時代の我々の

先輩當時の先覺者がどんな事を一番痛切に感じたかと申すと、此西洋の物質文明の非常な發達、我々日本人が二百年余眠つて居る間に急速な進歩が遂げられてをつたのであります。そこで始めて此歐米の文明に接しました日本人としてすつかり面喰つてしまつた、すつかり驚ろいてしまつたのでありますが當時はさうであつたであらうと今から想像するのであります。そこで何でも兎に角駈足で以て西洋文明に追つかなければならぬ、日本人自らが謙遜して「歐米の先進國」といつて居つたのであります、後進の日本として先進國に追つつかなければならぬ、所謂わき目もせず馬車馬的に進まなければならぬ、どの方面に進むかといふと物質的文明、西洋的文明を頭に注入する、吾々が教育を受けました當時は全くそれでありました。智恵の一方でありますす智恵さへつけばいゝ、物を知ればいゝ、而も其知るのは唯物的科學的であつて信仰などゝいふものを認める余地がなかつた。所で段々やつて參りましたが余り知的方面に偏した教育でありますからまもなくそこに缺點を見出しま

した。知識ばかり出來た頭ばかり發達しまして洵に貧弱な身体である肺病といふ病氣がどん〳〵學生の間に蔓延し有能の士が大學を出れば倒れてしまふ是では學問があつても智恵があつても駄目だそこで体育といふものが初めて重んぜられ西洋流の体操といふものが流行し、又柔道劍道といふものが漸く復活してきましたさうして西洋崇拜の時代でありますから此西洋流儀のスポーツがどん〳〵輸入して參りまして、そこに智育と共に体育といふものが出來て來たのであります。

所が明治廿年前後になつて來ましてどうもそれではいけない、何か足らない、是は要するに西洋の或人が言つて居る「信仰もなければ德操といふこともない唯知識だけの人間を造るのは惡魔を養成するやうなものである」といふ語がありますが慥にさういふ弊害が現はれて來ました。そこで今度は德育といふことがどん〳〵盛んに行はれるやうになりました、其當時日本の教育界がどの方面に向つて進むかといふ事が問題になつた、どこまでも

西洋流で進むか或は東洋にもいゝ所がある、特に我國には尊き國粹がある、此國粹を保存すべきか　此二つの說が現はれて色々爭つて居る。そこで、明治天皇が「敎育に關する勅語」をお下しになつて有がたくも「敎育ノ淵源」をお示し遊ばされました即ち「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」これはお上の御德で下萬民に於きましては「克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ」と克忠克孝、億兆一心の德を完うして茲に立派な國體の華が咲いて居る「敎育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」此處まで溯つて敎育の大方針としなければならぬ　そこで我國の德育の大綱が定まつたのであります。

爾來德育が盛んに行はれまして稍々完全な人間を作り出すといふことになつたのであります。

既に智育に依つて「知能ヲ啓發シ」又体育に依つて身体を鍛錬し、而して德ある所の所謂「德器ヲ成就シ」といふことになつて、實に敎育の大目的は遂げられて居るやうであります。所が暫らくしましてどうも何か一つ足らないものがある、それは何かと云ふと、情操の訓錬で、所謂情操敎育と云ふことであります人間は妙なものでありまして――人間は理性の動物だと謂はれて居りますが併し實際に於て人間の動くのは理性よりも感情である感情方面より見る趣味と云ふものが低劣であれば、如何に德育を授けましても、それは低劣な趣味に累はされて高尙な德は行はれない。そこで情操方面から之を完全にしなければならぬ。斯ういふことが其處に當然起つた要求であります。

是は皆さんも家庭に於て御實驗になつて居る事と思ひます。例へば吾が子供を敎育するに就いても、宗敎の道を守れ、德を養へ、能く學問をし、學を修め業を習へ、立派な人物になれと云ふことを敎へます。併し實際に於て、本當に立派な者に仕上げるには、喧しく

言ふ理窟をもつて教へたのではなか〳〵効果があがりませぬ。それよりも子供が學校から歸つて來る前に、机上の一輪挿に何か花をさしておく、さうして机の前に戻つた時綺麗な花だなアと思ふ、斯ういふ感じ、さういふ美くしい情緒を涵養する、その感情方面の教育が出來て來ますれば、自然に賤しいさもしい方の趣味が廢れて人間が高尚なものになつて來ます。そして智も德も自然と完成する樣になります。そこで美的教育、情操教育といふことが必要である。此處に教育當局が感付いて來たのであります。かくて初めて智育あり体育あり、德育あり、更に情操教育、美的教育を施して最早人間は完全なりと斯う考へられるのであります。所が今一つどうも何か物足らない、一大事に突き當つた時に直ぐ崩して仕舞ふ人間、直らに神經衰弱に陷るやうな人物、是では役に立たない。是はどうかと申すと肚に信念がない、固く強く信ずるものがないからさう云ふことになる。是に於て情操教育と云ふ中にも、特に宗教的教育、宗教的情操を十分に涵養するといふこと、是が

當然なければならない、稍く今日に及びまして宗教教育が旺んになつたのであります。是は誠に國家に取りまして喜ぶべき事であると私は深く信じて居るのであります。所で此間も文部省から通牒が出て居つたやうであります。

宗教教育を學校に於て盛んにせよ、併し宗派の教育をすな、斯ういふやうな通牒であります。是は當局に於てもジレンマに陷つて居る、宗教的情操は涵養しなければならぬ、信念を養ふと云ふこと即ち何か人間以上のあるものを認めて之を信ずる。是がなければならない、併しながら宗派の教育を施してはいけない、是は一寸實際に於て難かしいのであります。宗教的情操と云ひますものは、既成宗派の何派かに依つて實現され、實修される、然るに其宗派に捉はれてはいけない、宗派的教育になつてはいけない、そして十分に宗教的教育を施せよといふ。文部當局としては是でいゝかも知れないが、實際教育の衝に當る者は大變お困りであらうと思ふ。

日本は殆んど世界中の宗教の展覽會のやうな趣きがありまして、御承知の通り日本古來の神ながらの道、神道と謂はれて居る、是も國体神道と云ひ、神社神道と云ひ、或は宗派神道と云ふ。其宗派的神道でも今公認されたものは十三派あるのであります。其處に持つて來て佛教が所謂十三宗五十六派に分れ、各々其派に管長を戴いて獨立の組織を有つて居る。又基督教も入つて來て、それも新、舊の二大別の外に何十の分派を成してゐる。近來はマホメット教も入つて來て居る、有ゆる宗教入つて來て居る。實に澤山な宗派がある だから一派に偏重した教育を施してはならない、是は仕方がない事であります

此點に就て、私が先づ考へる、凡そ世界中に同じ樣な人間、その人類の數が十六億と謂つて居ります二十億近い此の多數の人類が履み行ふて行くべき道、萬人が萬人共守るべき道がさう澤山あつてはならない筈であります。何十何百と云ふ派があつては人類は其の歸趨に迷ふ、何方に行つていゝかと判斷に迷ふのであります。どうも是は唯一つであるべき

筈である。斯ういふ感じは誰れにも當然起つて來るのであります。私もさう信じます。

私共の教祖と云ふ人は曾て此點を力說した、それはどうかと云ふと「道は唯一つ」——此の「あめつち」の間に——あめつちと云ふ字は「天地」と書く——此の大きな天地の間に道は唯一つであると力說したのである。そこで天地一條一貫の道、その唯一の道を眞直ぐに行くのが人間の本道で、さうして此の位樂しい安樂な、此の位立派な事はない、

「天地にたゞ一筋のその道を直ぐに行くこそ樂しかりけれ」と詠んで居る。此の眞直な道を我々は眞直に進んで行く、そこにこそ本當の人生の樂しみがある、誠に「天地にたゞ一筋のその道をすぐに行くこそ樂しかりけれ」であります。で彼は斯道を「天照大神の大道」と申しました。恐れながら一切を天照大神に歸し奉るのが我が教祖の根本精神であります。かくて世界萬民の奉ずべき道、即ち天地の間の唯一つの道は「天照大神の大道」あるのみと我々は絶叫して居るのであります。教祖は常に「黑住左京に目を附けな」と云ひ

ました。多くの弟子は先生先生と言つて集まつて來る。其の多くの弟子等に對して、彼は此の道は左京の說く道に非ずして恐れ多くも天照大神の大道であると、常々諭しました。更に進んで「釋迦、孔子たりとも其人に目をつくるは迷ひなり、其の德こそ尊とけれ、その德は直ちに天德なり、これを離るれば外道なり」と喝破しました。何人が尊いと云つてもその人が禀けてゐる、天の德こそ尊いのであつて、其の人に目を附けるのは外道なりと云ふのであります。お釋迦樣は尊い。孔子樣は尊い、キリストも尊い、併しさういふ人に目を附けるな、其人に依つて派を唱へるのは佛敎の所謂「外道」に陷るのである。

隨つて此の黑住左京に目を附けるな、黑住の袋を破れよと言ふて居る。黑住といふ小さな袋に入つて仕舞ふと洵に小さなものになつて仕舞ふ、釋迦の袋、キリストの袋、皆同樣である。その袋を破つて出て見れば道は「天地一ばいの大道」であると申して居るのであります。此の大天地一バイの大きな道、是れ即ち「天照大神の大道」――是が宗敎に對する黑住敎祖の考へ方である。釋迦も孔子もキリストも皆尊い人であるが、其の尊いのは其人が天から頂戴して居る、天照大神から頂戴して居る、其の御心が尊いのである。元を忘れて其人に目を附けてはならない、其人に目を附けて派を作つてはいけない、弘法、傳敎法然、親鸞、日蓮等、日本には立派な宗敎家がある、我々の先輩として斯ういふ偉人を有つて居ると云ふことは日本人の誇りである。併し其人に目を附けてはいけない、道は唯一つである、大神の道であると云ふことを何處までも能く考へなければならぬ、然らずんば外道に陷るといふことを申して居るのであります。

此の點から考へますと今日の宗敎敎育は、「天照大神の大道」として之を行ひまするならば、それこそ文部當局の意見にも叶ふのみならず、實にそれが本當だと思ふのであります――世界的に言つてもそうであるが、少くとも現在の日本に於て此の天照大神中心の信仰を押立つるべきであつて、やがて人々は天照大神の大道といふことに目覺めて來て居る

と私は信じて居るのであります。

然らば各宗各派を通じて所謂宗教といふものゝ神髄は那邊にあるか、宗教的情操と云ふものゝ其神髄は何處にあるか？　是は各宗各派を通じてのエッセンスと申しますか、精粋と申しますか、所謂道の道たる所、之に就て私が先づ考へて見る、――學校の教育に於てもさういふ方面から着手せられる事を希望するのでありますが、第一は「信賴」と云ふこと、信賴は信じ賴むといふことであります。是がなければ宗教にならない、その信じ賴むと云ふことに就て、芭蕉翁の有名な俳句がある。「冬籠りまた倚りそはん此の柱」――段々冬になり山にも野にも雪が積つて來て冬籠りをする、雪に閉ぢ込められて毎日徒然に暮す、其時に話をしたり書物を讀んだりして暮して居る唯坐つて居るといふことではいけない、大きな柱に――大黒柱にもたれる、其處に感ずるものは何となくのびやかな落着きである。此の倚りそふといふ柱、そのよりそふといふ所に宗教的信賴の第一歩があると私は

思ふのであります。芭蕉といふ人は偉い人でありました、唯の俳人でなく所謂俳聖と謂はれましたが、慥に宗教的情操の深いものを捉へた人であります。其の芭蕉の句にまた

「先づたのむ椎の木もあり夏木立」

是は近江國石山の幻住庵に居りまして詠じた句であります。此の幻住庵に一本の大きな椎の木がある、それを自分が其庵に居る間一番賴みとして居つた。その椎の木の蔭に居ると何時も涼しい風がそよ〳〵と吹いて居つていゝ感じである、斯ういふのが芭蕉の句であります。こゝに至りましてこれは宗教的情操の豊かな句だと言ひ得るものと思ふのであります。

斯の如き賴むといふ、よりそふと云ふ此の安心、是は總て宗教的なものであります。人間は皆是れがなければ生きて居れない。其處で幼少の時には兩親が賴り、學校に行けば先生が賴り、校長先生と云ふ洵に絶對的に信じ得る人が居ります。併しながら段々大きくな

つて社會に立つて行くと、自分の兩親にも不服が澤山ある。校長先生とても完全無缺なものではない、何か本當に賴りとなるべきもの、何時も賴りとなるべきものを求めて來る。そうなると本當の宗教的情操と云ふものになつて來るのであります。今あつて直ぐ無くなるやうなものではいけない、此の事には力があるが、此の事には力にならない、あの人は金の事にはたよりになるが、其他の難しい問題になつては相談しても役に立たない、あの人は學者で何も彼も教へて呉れるが、社會に立つて指導する上に於ては駄目だ、是では本當の信賴にならない。

人間は有限物であります、我々は如何に大きいと謂つても、此世に在るもので、如何に我々が力が拔群であると謂ひましても、例へば昔の講談にあるやうに百人力の勇者であつても、五十人、七十人、百人と云ふその力に於て凡て限りがある、是に於て、永久に存在する、何時でも存在して居る、さうして無限の力を有つて居る、絶大なる德を有つて居る

ものを求めて之にたよる、即ち此の信賴するといふことが自然起つて來るものであります

獨逸のシユライエル、マツヘルといふ宗教學者が言つて居る、宗教といふことは我々有限者が無限者を憧憬して之に歸依する所の心持、是が宗教である、――簡單に云へばさうであります。大体人間以上の何か大きな力、そうして其ものが永遠に存在して居る、何時も存在して居る、而も無限の力を有つてゐる、所謂全智全能の神、――そのものに向つて信賴し、そのものを絶對に信じ賴む、少しも疑はない、そこに我々の宗教的信念が生ずる是に於て我々が強き者となつて來るのであります。どんな事があつても神が我々を助けて呉れる、我々は常に神と共に在る、此の信念が當然起つて來なければならない、此の信賴といふことが宗教の本質で且つ第一のものである。信じ賴む、大きな無限の力を賴んで行くといふ、どの宗教に於ても見方は違いますが、さうであります。

「抱かれてありとは知らずおろかにも我れ反抗す大いなる手に」これは九條武子夫人の

有名な歌でありますが、我々は皆大いなる手に抱かれて居るのであります。それを駄々つ子が親から背き離れる樣に離れ、そして自分の賴りない力を以て反抗しようとして居るのが、お互の淺薄な態度であります。それではいけない、絶對に之に歸依する、基督敎の「アーメン」佛敎では「南無」皆其の歸依信賴を意味する力强き言葉であります。

黑住敎祖の敎へに依りますれば、天照大神をお慕ひ申して、絶對に之を尊信するのであります。我々は何も心配する事はない、何處へ行くにも天照大神樣がついて御いで下さる

「天照す神もろともに行く人は日毎〳〵にありがたき哉」

と敎祖は詠んで居ります。更に一歩進めて考へると、我々は實に大神の御腹の中に住んで居る。

「天照す神の御腹に住む人はねてもさめても面白き哉」

と云ふ此の法悅、宗敎上の悅び!!——天照大神の其の御腹の中に住むといふ自覺に生きるものに取つては、行住坐臥感謝あるのみ、寢ても覺めても唯だ悅びあるのみ、法悅あるのみ!! 茲に宗敎の神髓があると思ふのであります。

次に宗敎の第二の本質、宗敎的情操の第二の神髓は何かと申すと「感謝」であります。既にそういふ大きなものを認めます、其の力に依つて我々が產み出される、其の力に依つて我々が生かされて居る、その大きな手に抱かれて居る、——斯う考へますと、我々の見る所、事々物々唯有難い。——例へば我々が食事をするといふことに就いても、唯我々が物を食ふのは當然である、斯ういふ風に考へて居りましては少しも有難くない。併しながら天地の大いなる神樣の惠みに依つて、我々が食物を與へられ、又達者で物を頂戴する、寔に有難い、斯う思つて食ふならば一回の食事も唯感謝であります。

恐れ多い事でありますが、第百十九代の聖天子光格天皇が神道の主意を御詠みになられました御製があります。

「世の中の食物着物なにごとも神の御法の外なかりけり」

世の中のをし物きもの、食物も着る物も神様の御與へ給ふ物であるといふ、誠に尊きお歌であります。そこで皆さんにお勸めします拍手を致しまして瞑目して、只今の御製を恐れ多い事でありますが、口の中に唱へまして、「世の中のをし物きもの、なにごとも神の御法の外なかりけり」――さうして箸を取りましたならば、どんな粗食でも大層美味しく頂戴する事が出來る。さうすると悉く消化します。さうして我々の本當の價値ある榮養となつて來るのです。どうかお忘れなく斯う拍手をし、更に合掌して「世の中のをし物きもの・・・なにごとも神のみのりの外なかりけり」と唯一分間瞑目合掌して、此の御製を口の中に唱へまして、さうして頂戴するといふことを今日から御實行なさる樣に切におすゝめいたします。さすれば誠に有難く御飯を頂戴する事が出來る、茲に宗教的生活の神髄が現はれて居ると思ひます。光格天皇が如何に神道の主旨をよく御理解遊ばされ、如何に深く神を尊ばれたかといふことは、此の御製を御詠みになつた事に就いても拝察されるのであります。

此の御製を我々が口にすると云ふことは恐れ多いやうでありますが、其の御製の意味を本當に情操的に味はつて、我々が日々いたゞく食物も皆天照大神樣が我々にお與へ下さつたものである、と斯う考へて頂戴すれば、御飯を食ふといふことが直ちに「宗教」であります。是は只一例であります。

此の「感謝」といふことが宗教的情操の神髄をなすものである、その第二を構成するものであります。

次には第三として「敬虔」――敬ひ慎む事でありまして、人間は兎角怠慢に馴れ易い、神から與へられた人間の自由の精神、是が放埒になり易いものである。所が如何に不行儀な人でも、如何に不作法な人でも、其人が神前に於て禮拝をする、神樣を拝む、佛前に於て御佛を拝む時に於ては決してあぐらをかゝない、必らず二三分は敬虔な態度を執つ

て居ります。是は無信仰の人には分らない、出來ない事であります。然るにどんな無學文盲な人でも何か大きな力を信じて、之に感謝するといふ氣がありましたならば、其人の態度は、その神を拜む、感謝するといふことに依つて自然と敬虔な態度になつて來ます。此の敬虔といふことが世の中を良くする下地だと思ひます。

今の世の中は餘りに粗雜であります。而も今日は自由主義だと謂つて得意になつて居た時代があつたのであります。本當の自由といふものは決してさうでない。放埒と自由とを一つにしてはなりませぬ。本當の自由人ならば、自分の尊い自覺を通じて必らず禮に叶ふやうになつて來る「己れに克ちて禮に復る之を仁と言ふ」と孔子が申して居る。

所で信仰があれば六ヶしい修養はしなくても自然と禮儀は備はつてくる、我々の最も尊むべき大御神樣を敬虔なつゝましやかな態度を以て拜する。此の事が人生百般に及んで來ます。何事に於ても愼ましやかな過ちのない人間が出來て來るのであります。黒住教の高

弟の一人である時尾といふ人が詠んだ歌があります。「五百重波立つても居ても大神の御そばと知らば由々しかりけり」「五百重波」と云ふのは「立つ」といふ語の枕詞であります。

即ち立つて居る時も、ぢつとして居る時も、何時も、大神樣の御そばに侍つて居ると思へば實に容易ならぬ事である、恐れ入つた事である。此の考へを以て行きますれば我々の言行は洵に敬虔そのものであります。愼重そのものである。多くの人が居るから愼しむといふ事でなく、誰も居らぬ所でも愼重にする、

即ち「獨りを愼しむ」といふことは、あなた方が何時も大神樣の御そばに居る、此の感じがあつて初めて徹底すると思ひます。人間が居ないと思ひましても我々は何時も、大神樣の御そばに居るのである。「大神の御そばと知らば由々しかりけり」でありまして、是は信仰を持たなければ分らない事であります。神に對しての此の敬虔の念が人生百般に及ぶと申したのであります。

所が今日對人關係に於て――人々の關係に於てどうです。そこには種々の爭ひがあります。勞働爭議があり、小作爭議があり、水平社運動が起つて居る。國と國との戰爭が絶えず繰返されて居る、洵に感心致し難き世相であると思ひます。是は人間同志が敬虔の念を以て先力を尊敬すると云ふことが缺げて居るからであります。信仰ある者は神を尊敬し神に絶えず敬虔の念を以て接する然らば同じ神の産み給ふ所の同胞――兄弟である、相鬩ぎ相爭うてはならぬ筈である。日本人も支那人も歐羅巴人もアメリカ人も一切が兄弟である世界に戰爭などあつてはならぬ筈であります。人間は皆一樣に神樣の御魂を頂戴して居るものである。儒教から申せば「天の明德」を有つて居る、佛教から申せば「佛心」を有つて居る、佛一体の尊いものを有つて居る、であるから佛を拜む心を以て互に人間を拜む。神道から云ひますれば、神の分靈、畏れながら天照大神の御分心をいたゞいてゐるのである、そこで神を拜む所の心を以て人を拜む、これでなければなりませぬ。

御承知でありませうが、西洋にカントと云ふ哲學者があつたが、此の人はその學說に於て倫理問題を根本的に解決せうと企てました。――倫理道德といふ事が多岐に亘つて居る、仁義忠孝、忠臣孝悌、皆道德でありますが、その根本は何か？　カントは之を解說して「道德と云ふことの神髓は相互の人格の尊重にあり」と言つて居ります。人間は人間と致しまして、假令學問があつてもなくても、智慧が高くても低くても人間であるといふ點に於て共通した一つの尊いものを有つて居ります。所謂「人の人たる所以のもの」であります。之を約して「人格」と申して居る。――此の人格はお互に有つて居る。乃ちその尊い人格をお互に尊重し合ふ。さうすれば喧嘩もなく、罵り合ふ事もない、一切は都合よく、立派に行く、是が道德の本義であると申して居ります。

黑住敎祖は此の「人格の尊重」を一段高く進めて、「神格の尊重」としたのでありますが「人格」と見るのではまだ本當の尊重が出來ない。あなた方がお互に尊び敬うて居るとい

ふその人格なるものは、實は神即ち天照大神から頂戴した御靈である。お互には神としての一つの格を有つて居る。神格を具へてをるのである。その神格をお互に拜み合ふといふ是まで行かなければ駄目である。――人格尊重より神格尊重に行かなければならぬ。此處に行けばもう何の爭ひもない。

教祖の有名な逸話がある。――教祖が他所からお歸りになりますと、奥さんが恭しく茶を出される。極く質素な暮しでありましたから番茶と思ひます。一椀の番茶を汲んでお疲れでありませうと云つて少しでも勞を慰めようとなされる。其時に教祖は神を拜むと同じ樣に拍手をして恭しく受けて禮拜をして頂戴せられる。是が度々の事でありますから、弟子の人が尋ねる、先生貴方は何時お見受けしても奥さんが汲んでお出しになるお茶を、恰も我々が神を拜むと同じ樣に拍手をして、さうして禮拜をしてお上りになつて居りますが、どういふお心持でありますか。――之に對する教祖のお答へは極めて端的であります。私

が豫ね〳〵言ふ通りにお互の心は我が心に非ずして恐れながら大神の御心である。尊いものである。賤しい心を離れて仕舞つて眞心になつた時には神一体のものである、我々はその時實に八百萬の神の一柱である。自分の家内が心を籠めて主人の勞を慰する爲に一椀の茶を汲んで出すといふ時には直ちに神の境地に立つて居る。だから自分は之を拜して然る後に受けるのである。――是が有名な逸話であります。

斯の如くお互が夫婦の間でも拜み合ふ、隣人同志拜み合ひ、兄弟同志拜み合ふ。資本家は勞働者の前に此の心を以て禮拜する。勞働者は資本家の前に此の心を以て禮拜する。斯うしましたならば何處に爭議があるでありませうか?!

水平社のモットーは御承知の通り「人間禮讃」であります。水平社の人々は甚だ氣の毒な方々で、永い間社會から差別的待遇を受けて來て居る。で、此の差別的待遇を受けて居ることは大變不合理であるといふことを憤慨して立つたのが水平運動である。此のモット

ーが人間禮讃、人間同志拜むといふことであります。尊敬して拜む、人間が互に尊敬し拜み合ふと云ふことでなければならん。獨り水平問題ばかりでない。人種と人種の問題に於ても亦有ゆる方面の問題に於て、互に差別し合ひて對峙することに依つて爭ひがあると謂はざるを得んのであります。

主人が奥さんを拜む、奥さんの力から主人を拜む、毎日〳〵人々互に相拜む、是に於て人類の社會は直ちに此の地上に高天原を實現するのであります。高天原は高き〳〵天上にのみあるのでない、遠き〳〵大昔の事のみではない。人間が眞に安らかに生活して、そして互に神として拜み合ふ、そこが即ちすぐ高天原であります。黑住教祖の御文章の中に、

「心安く暮し候こそ高天原と奉存候、その原こそ神はましますと奉存候」とある。

誠にその通りである。さて、

こゝ迄來まして初めて敬虔の念と云ふものが非常な効果を社會政策の上に現はして來る

——世界に戰爭と云ふものがあつてはいけない、そこで現に軍縮會議が催されて居るやうであります。併し名は軍縮會議でありますが互に自分の方の軍備は十分に備へたいと云ふ考へであります。それでは本當の意義を爲さないのであります。本當はさういふものが全然不用になつて仕舞つて社會上に曾て戰爭がないと云ふ時代を必らず我々の理想として掲げて置かなければならんことであります。そこまで到達しますには色んな徑路を經る事と思ひますが、人類文化の最高の理想に到達し、互に國と國とが戰爭をしないと云ふことでなければならん。黑住教祖は之を歌を以て示しました。

「誠ほど世にありがたきものはなし誠一つで四海兄弟」

と詠んで居る。誠といふ事はたゞ偽りを言はないといふ樣な狹い淺い意味ではない。教祖は「誠とはマルコトなり」と云つた「マルコト」は圓滿無礙の大調和相であります。お互に圓い〳〵圓滿な心を以て、大調和を保つ事が即ち誠である。世界全体が圓滿な調和を保

つて行く、此の心を以て行けば今日世界の戰爭と云ふものは杜絶するのである。同胞兄弟となり得る。實に「誠ほど世に有難きものはなし誠一つで四海兄弟」と詠んで居るのであります。是は本當であります。そこで絶對者に對する——神に對する禮讃、敬虔の念、是は我々の一擧一動を敬虔ならしめ、その一言一行をして謹慎ならしめる。かくて互に人を拜み合ふといふ人間禮讃になる。眞乎の神格尊重である。その結果の及ぶ所國と國とが圓滿に協調して、世界が圓く〳〵治つて行く、「マルコトの世界」が出現する。高天原が現實の地上に建設される。誠に尊い事であります。それはつまり「敬虔」といふ事の徹底であります。それで此の敬虔と云ふことを宗教的情操の肝要神髄、即ちその第三の本質と申す次第であります。

既に絶對者があるといふ、そこに「信賴」がある。其の次に之に對する所の「感謝」而して我々の一切の行ひ、一切の言葉、是が悉く「敬虔」そのものであり、慎しみそのものである。斯うなつて來ますと最早宗教が立派に出來上つて來るのであります。併し、そこまで行きますと、更に宗教的情操は一大飛躍して、「祈念」「祈り」といふことが出て來ます。宗教の一派に於ては祈りをしない宗教があります。併し是は祈りをしないに非ずして、祈り以上の祈りをして居る。祈りをしないでも神を堅く信じ切つて居るのである。神が、絶對者が、何もかも承知して屹度よくしてくれると堅く信ずるのである。此の意味から云へばそれは最も徹底した祈りと言ひ得るのであります。併し祈りは宗教に必らずついて來る

此の祈りは宗教の何より強き本質を爲すものであると申上げ得るのであります。

此の祈りは色々あるでありませう。どうか五穀が豊穣するやうにといふ祈りがありませう。商賣が繁昌するやうにといふ祈りもありませう。色んな祈りがあるのであります。併し一番大きな日々の祈りは何か？昔からの宗教的天才——偉大なる宗教家がどういふことを祈つたか。

孔子の祈り、孔子は別に形式的の祈りをしなかつた人であります。これ〳〵の事を今かうして下さいといふ祈りはしないが、絶えず祈つて居ると言つて居る。君をして堯舜たらしめる――堯と舜とは支那の古代に於る二人の理想的の聖天子である。現代の君が遠き昔の堯の如く舜の如き德を以て世を治める樣に、即ち君をして堯舜たらしめる。而して民をして堯舜の民たらしめる、是が孔子の祈りである。心中不斷の念願である。釋尊は何を祈りましたか？　法華經の神髓といはるゝ自我偈の最後に出て居ります「毎自作是念、以何令衆生、得入無上道、速成就佛身」……毎に自から是の念ひを作すといふのです。――何を以てか、どうしたら一切の衆生をして無上道、此の上もなき尊き道、眞の大きな道に入つて、速やかに我と同じ悟りに達した佛の身と成らしめ得るか、少しも早く凡てのものをして佛一体の境地に進めてやりたい!!　これはお釋迦樣の誠に尊い祈りだと思ふ。又キリストは何を祈つたか？　彼は祈りました。神、天地に唯一つの神樣、その神樣の御名を

あらゆる人類が口に於て之を崇めまつる、心に於て尊敬し奉る。人類お互が神を崇めまつるやうに崇め合ふ。そして茲に「神の國」が出現して、神の御心が――御攝理が、天に於けるが如くに此の地上に於ても、行はれるやうに、何事も御心のまに〳〵、神樣の思召し通りに行はれる樣に、

「天にいます我等の父よ、願はくば御名の崇められんことを、御國の來らんことを、御意の天の如く、地にも行はれんことを」

さて此の御心が天に於て行はるゝと云ふ事に就て考へまするに、多くの星、何十億、或は百億と數へられて居る、此の多くの星が一分一秒の間違ひもなく、そしてこつとりともいはず、規律整然と靜かな運行をつゞけてゐる。我々が住んで居る此の地球、周圍一萬里もある此の一つの大きな天体が太陽の周圍を廻る、一年――三百六十五日五時間四十八分四十六秒、一秒の違ひもなく廻つて居る。神樣の御掟は、大宇宙のどこでも一毫一釐の相

遠もなく行はれてゐる。何事も御心通りなのであります。然るに此の地上に於ける人類のみが、その與へられた自由、特殊の御恩寵たる「自由」に依つて我儘な生活、氣隨な行動をして絶えず神樣に背く樣な事ばかりして居る。そこで、此の地上のみには神の御心が十分に意の如くに行はれない事となつてゐるが、どうか、人類の住む此の地球上が神樣の國、天國になるやうに、そして、天に於ける如くに御心が十分に此の地上にも行はれる樣にと云ふ。是がキリストの本當の祈りであります。所謂「主の祈り」と云はるゝものであります。洵に徹底した祈りと我々は敬意を表します。御地から出身して居る賀川豐彦氏が、「神の國」の運動をして全國を説いて廻つて居る、御國の地上に來る樣にと云ふ運動であります。是は立派な運動であります。併し此のキリストの考へて居る事、その祈りが、キリスト教の力では、或はキリスト教の立前では、中々實現するに至らないのであります。その事をあとで明らかにしたいと思つてゐます。

そこで蠟つて、我が黒住教祖は何を祈つたか？それを申して見たい。

教祖は度々、伊勢の皇大神宮に參詣したのでありますが、その時何を祈るかと云ふと、恐れ多い事であるが、「天照大神の御開運」を祈り奉る、これがその唯一の祈りでありました。此の意味はどうかと申すと、世界中の者が「天照大神の御名」を口にして、之を崇めまつる、之を讃美する。全世界の國々が唯一つの神の國、天照大神の神國となる。そしてあらゆる人類が同一の神より出でたる同胞兄弟として、丸き誠の德を以て相交はり、かくて凡てが此の地上に於ても神樣の思召通りに行はれ、人間が凡て恐れながら御神慮通りの人類になる、換言すれば、大御神樣御一体の神格となるやうにと祈るのであります。―最も高く正しき大きな祈りであります。我々は天照大神の御開運を祈り奉る、此の祈りを神に捧げる。

基督教の理想は結構でありますが、世界が一つになる、唯一つの國になるといふ現實の

問題は、キリスト教の愛の教へだけでは成就しないと思ひます。そこには方法がなければならん、そこには政治と國家といふものが考へられなければならんのであります。是は日本の如き國、萬世一系の國と謂はれて居る日本が、此の世界の特に中心となり、世界の總てが一つになつて來なければならない、キリストの祈りの如くたゞ神の國を祈るといふのでは、その神の國は現實には出て來ないと思ひます。基督教の愛の精神は結構だがそれだけで、世界を一つの國にする理想を實現する具体的方法はない、我々はそれに遺憾を感ずる。そこで黒住教祖の如く「天照大神の御開運」を祈り、その御神孫にまします我が天皇陛下が將來世界全体を統治し給ふ、我が大君の御稜威に依つて、日本の道義の力に依つて、世界の凡ての人類が絶對的に統べられる、此の時代が來なければ神の國の出現は成就しないのであります。單に「神の國」を祈つたのでは、そこに何等その實現の實際的方法が含まれてゐない、――天照大神の神の國、天照大神の御神孫の統治に成る神の國でな

ければならない。茲に黒住教祖の「天照大神の御開運」の祈りが、キリストの祈りと一段進んだ所があるのであります。

さて今日國体明徴問題が喧しいそれもまだ〳〵學者が言つて居るやうな所では不徹底と思ひます。我國の皇祖、天照大神は、一面我國の皇祖であると共に、實に大宇宙唯一絶對の大御神である。此の宇宙に一つの絶對的の大御神樣、天地萬有の親神樣が我國の皇室の御祖先、皇祖として御出現あらせられたのである。と、そこまで徹底して來なければ本當でないと思ひます。一切が天照大神の御神勅のまにまになる。――世界萬國、國多しと雖も萬世一系の天皇を奉じて居ると云ふ國は何處にあるか、神武天皇以來二千五百九十年少しも孔隙が入つてゐない、少しも缺ける所がない、此の金甌無缺の國体は何かと申すと、偶然にさうなつたのでない。最初の建國の第一歩に於て恐れ多くも天照大神が皇孫瓊瓊杵尊に對し御神勅を給ふて居る。此の御神勅に何とある、「豊葦原千五百秋の瑞穗國は我が子

孫の君たるべき地なり」我が子孫のみが　天皇となるべき國であると仰せられ、「汝皇孫ゆいて治らせ寶祚の隆えまさんこと天壤とともに窮りなかるべし」と仰せられて居る。唯偶然に三千年の歴史を有つて居るといふのでない。最初の建國の始めに於て天照大神の御神勅に、此の豊葦原瑞穗國は我が子孫が代々受繼いで天皇となつて治むべき國である、決して他の者が之を受繼ぐ事を許さないとありまして、天孫降臨以來其の御子孫が天津日嗣に卽かせ給ふのでありまして、その御子孫、その天皇の御位は天地と共に窮りのないものである、と仰せられて居る。是が天照大神の御神勅でありまして、之れを十分考へて居りましたならば、天皇機關說等といふ間違つた學說が入つて來る筈がないのであります。

黑住敎祖は此の點に就て、國民に警告する所ありて、我々は何を忘れても斷じて忘れてはならぬ事がある、それは何であるか、「天照す神と君との一すじを忘れ給ふな人の心に」と詠んで居る。唯萬世一系と謂ひましても、　神武天皇人皇第一代から今日第二百二十四代に及んでゐるといふのみではない、更に溯れば　皇祖天照大神より傳はつた、此の神より君に傳はつた、即ち神と君との一系を、之を約しますと「神君一系」と云ふ此の四字を以て現はす事が出來ると思ふ。神君一系の國体「天照す神と君との一系を忘れ給ふな人の心に」國体の神髓は茲にあるのであります。その一首は

「天照す君の光りは千早ぶる神代も今もかはらざらまし」

どんな歌集を見ましても「天照す君」といふ言葉はないと思ひます。これは全く黑住敎祖の獨創の語でありますが、日本の天皇は大君にましますと共に、天照大神の御子孫でありその御神位の高御座にお卽き遊ばされる、

正に天照大神と御一体に渡らせらるゝが故に、唯だの「君」でなく、實に「天照す君」にまします。そして天照大神はキリスト敎に云ふゴッドの如く、唯の神に非ずして、我國の皇祖として御出現遊ばされ、歴代の天皇を通じて永遠の大君主にまします、されば「天

照す神」にておはすと同時に、大君なるが故に之を「天照す君」と申し上げる。かくて「天照す君の光りは千早振神代も今もかはらざらまし」神代の昔天照大神と申上げた、此の最初の大神と、今日の天皇即ち君にして同時に神にまします、現に現人神と崇めまつる天皇と御一体である。之を「神君一体」の義と申し上ぐる。

是に於て我が國体の眞義は、前の「神君一系」の歌と、今の「神君一体」を詠じた一首とに盡きて居ると申しても、決して過當の言に非ずと私は信じて居るのであります。「神皇一系」「神皇一体」にして天壤無窮なる皇室を上に戴く此の日本の國に生れたといふ此の位有難い事が、何處の國にあるか？　人生、隨分感謝すべき事はある、色んな事を感謝すべきであります。併し何よりも我々日本人として此の日の本に生れて、現にその日の本に住んで居るといふことは、何といふ幸福な事であらう!!　此の感謝の念――之を我々が有つて居りましたならば、決して不足はない、何事に對しても不平不滿はないのであります

之れに就いて黒住教祖は

「ありがたや我れ日の本に生れ來て其の日の本に住むと思へば」

と詠んで居ります。我々は此の日の本に生れて現に此の日の本に住んで居る。日本國に住んでゐる、何といふ有がたい事かといふ此の感謝、これこそ最も尊い、最も清らかな感謝と思ふのであります。日本國民が之を忘れまして不平を言ふのは何といふ錯覺であらう、何といふ間違ひであらうと結論せざるを得ないのであります。

斯の如く致しまして、我々日本國民が心を一つにして唯一つの大神を信賴して、さうしてその前に絶對の感謝を捧げ、唯毎日〳〵感謝あるのみ、法悦あるのみといふ生活をなしさうして我々お互に敬虔の念を以て、お互に人格を尊重し、否、お互に神格を尊重する、拜み合ふといふ生活の徹底、さうして祈るのは何を祈るかと云ふと「天照大神の御開運」を祈り奉るといふ此の大きな祈りであります。こゝに國体の明徴も、世界の平和も一切が

含まれてゐます。宗教の肝心はこゝに盡くされてゐます。

さて内村鑑三氏が死に臨んで「宇宙の完成」を祈つたといふことであります。なる程大きな祈りであります。併し理窟を言ふのではありませんが、宇宙といふものは、無限絶大であるから、いつまでたつても決して完成することのある筈はない。だん〳〵良くなつて行く、益々良くなつて來るが、完成してしまふ事はない。そこで「運」といふ一字が必要である。適切である、「運」はめぐるで、次第〳〵によくなり次第〳〵に開け渡る。――これは「完成」でなくて「開運」である。彌榮えの日本の國体は、「運」の字で顯はすべきである。此の點に就て明治天皇の下し賜はつた教育勅語に、「以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と宣ふてある。是は我々が「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」此處に家族的、社會的に修養を完うし、或は「學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就」する是れ皆皇運を扶翼する所以であります。一旦緩急あれば義勇奉公の精神を發揮するのも、我々日本國民が大いに皇運を扶翼する所以である。「皇運ヲ扶翼スヘシ」と云ふ此の「運」の一字が眼目と思ひます。黒住教祖は「天照大神の御開運」を祈り奉つた、教育勅語の「皇運扶翼」と同意で「運」の一字が期せずして符節を合する。

さてその祈るといふ事に關して、神道では拍手を打ち、佛教では合掌する、それに就ていつか岡山の教育會館で話した時に或人が質問されたので申した事でした。此の合掌の姿は尊い、人間の合掌してゐる姿は尊い、この位つゝましやかな靜まつた態度はない。併し始めからたゞ合掌するのでは、陰に閉ざして陽に開く事がない、そこに印度的で日本的でない所がある。だから先づかうパチッと拍手を打つ、これは極めて「陽」な姿「陽」な態度であります。元來日本は生々發展の國、陽氣元氣な國、活潑な國、どん〳〵盛んに榮えるといふ國であります。そこで國民が神ながらの道を守つて、神樣を拜む態度は「拍手」是れであります。此の聲天地に響けよと打つ、天地の誠を呼び起すといふのが此の拍手で

あります。所で日本には左を尊重するといふ習慣がありまして、茲に拍手を打つ時には、先づ左の手を出す、そして右手を出して拍手を打つ、最初必らず右は少し下つて居ります拍手の時、左の手は神を表はし、右の手が人を表はします。人間は低く神は尊いのであります。だから人間が下つて居ります。さうして此の人間の誠が通ずる、至誠神に通ずる、此の拍手をうつ時には天地も動かすといふ、その誠の心が神に通ずる、右の手が伸びて左と一に合する、その時が神と人と一体になつた姿である。

更に詳しく云ふならば、此の拾本の指が一つになる、これは十人十色のその人類が一つとなる、億兆一心、その美を成す所で、唯一つになり、唯だ誠一つに止まつて恭しく感謝する姿、此時自然に合掌となつてゐます。こゝに至つては佛教も神道もありません。——必らず先づ拍手して盛んな精神を振ひ起して神に音なひ、さうして神と一体になつて、更に十本の指が一体となり、全人類が一体となる、是が拍手と合掌の合一で、人間の姿勢態

度として、最も完全なるものと思ひます。

斯の如く絶えず拍手し、合掌して神を拜む、茲に一切の事は解決するのであります。

孝明天皇の御時代、幕末の當時は、日本全國の上下の聲は、攘夷〳〵と言つて、毛唐人たる西洋人を打拂つて仕舞ふのが日本精神として高唱されたのであります。なる程それも日本精神の一つの現はれには相違ありませんが、併し本當の日本精神はそんな狹いものではない、あらゆる人類を抱擁するといふことが日本精神の神髄であります。我々は外國人を大砲や飛行機を以て爆撃する。斯ういふ事が本旨ではない、日本の國民が何時も敬虔の念を以て、神を崇める心を以て精神とする、一切の事が此の拍手合掌の姿を以てやつて行く。政治も實業も、教育も皆此の敬虔な心、敬虔な態度で、眞面目に遂行する、さうなりますれば、神のまにまに、御神慮のまにまに放つて置いても、世界のあらゆる國民は、日本に集まつて來る。悉く日本の　天皇を中心として、さうして世界の總ての國が集まつて

來る。此の世界各國が本當に一体となつて天照大神の神國となるのであります。

そこでその幕末の當時、京都に居て畏れ多くも孝明天皇の勅願所となつた宗忠神社（黒住教祖を祀る――宗忠は教祖の名）に奉仕した教祖の高弟赤木忠春は、

「夷等は討つには足らで八平手を打ちならはして神のまにまに」

と詠んだ。――こゝに本當の日本精神、本當の惟神の精神が顯はれてゐます。

最後に私のモットーを申し上げて置きます。私は日蓮聖人に多大の尊敬を拂ひますが、併しその「四箇格言」は餘りに排他的だと思ひます。で私はモットーとして「新四箇格言」を提唱しまする。我々は神樣は須らく「天照大神」の御名に依つて統べられ、一にせられなければならぬと思ひます。天地唯一絶對の大御神、即ち唯「天照大神」と信じます。勿論八百萬の神は認めますが、それは大御神の御神德の個々の顯現であります。そこで道は唯だ一つ「天照大神の大道」あるのみです。そして又、政治的、國家的には、唯だ天照大神の御神孫たる我が　天皇陛下が唯一の眞天子として、大君として世界が一つとなる、即ち天照大神の神國となる。之を簡潔なる言葉に依りまして現はすならば、「神は天照大神、道は天照大神の大道、君は天照大神の御神孫、國は天照大神の神國」是であります。これが私の所謂「新四箇格言」であります。そして言ふ迄もなく、此の四箇格言の實現した場合が、黒住教祖の所謂「天照大神の御開運」の御時節の到來であります。天照大神の御開運の祈り」といふ大きな祈りの中には、宗教のみならず、政治や道德の一切の神髓、一切の理想が含有されてゐます。私はあらゆる宗教宗派を尊重します。日蓮聖人を尊敬する、キリストも尊敬する。併しあらゆる宗教が唯だ「天照大神の大道」と云ふものに大きく一つになつて行く、これでなければならぬと思ひます。日本の思想統一、國論統一、凡ては此の一點にあると私は確信して居る者であります。

黒住教德島教會所	德島市富田弓町二丁目
黒住教佐古教會所	德島市佐古町九丁目
黒住教中田教會所	德島縣勝浦郡小松島町中田
黒住教富岡教會所	德島縣那賀郡富岡町大字富岡
黒住教羽ノ浦教會所	德島縣那賀郡羽ノ浦町中庄
黒住教大里教會所	德島縣海部郡川東村大字大里字濱崎
黒住教美馬教會所	德島縣美馬郡西祖谷山村大字重未
黒住教脇町教會所	德島縣美馬郡脇町
黒住教舞中島教會所	德島縣美馬郡三島村大字舞中島
黒住教池田教會所	德島縣三好郡池田町大字池田
黒住教川崎教會所	德島縣三好郡三縄村大字川崎
黒住教鴨島教會所	德島縣麻植郡鴨島町鴨島
黒住教上浦教會所	德島縣麻植郡牛島村大字上浦字梅市

昭和十一年三月廿三日印刷
昭和十一年四月一日發行

編輯兼發行者　渡邊一雄　德島市富田弓町二丁目千五百二番地
德島市二軒屋町字本町西四十二番地

印刷者　中山國義

印刷所　中山印刷所　德島市二軒屋町字本町西四十二番地

發行所　黒住教德島教會所　德島市富田弓町二丁目
振替德島五七七二番

終